The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「ヨコミチ」
Author(s)	下田, 元毅
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 114-115
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53606
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「ヨコミチ」

下田元毅／大阪芸術大学大学院芸術研究科　助手

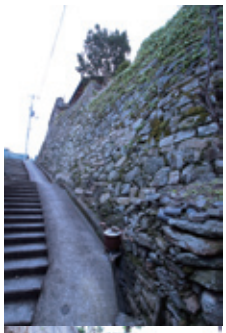
計画概要）

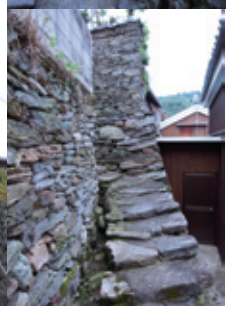
この提案は，「ミチ」の計画である。

塩津集落の住居形式の特徴である「通り土間」を，空き家・空地の再編とともに「ミチ」として位置づけ，避難経路のみならず日常の生活動線としても活用していく計画である。

塩津集落）

対象敷地は，和歌山県海南市塩津集落である。和歌浦湾の南に位置し，２つの岬が海に張り出して形成した湾に面したすり鉢状の北斜面に，居住域が展開している。湾に沿って走る道路から，幅員1.2～1.8m の細い道が集落内部に向かって階段を伴いながら不規則に網目状に入り込んでいる。集落内の住居は，等高線に沿った階段状の敷地に建てられて，その境界はこの地域一帯で産出する青石（緑色変成岩）による石積みや石塀によって区画されている。塩津は，廻船業で栄えた財力によって高度な技術によって石が積まれている。集落内の道を歩く時，石垣や石塀が奥行きをもって見え，誘導されるような印象を受ける。



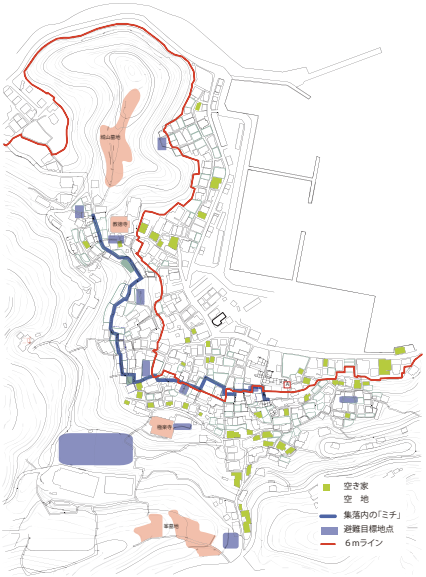


塩津の抱える問題）

現在，塩津集落では少子高齢化が進み，空家，空地が増えてきている。また，階段や傾斜の多い集落での生活は，お年寄りの歩行の負担になっている。高低差が生活動線を制限し，日常生活の範囲を狭め，それに伴いコミュニティーの希薄化も伺える現状である。

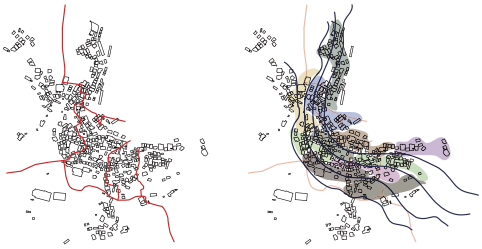
避難目標地点）

塩津集落は，津波の被害にも危惧される集落である。現在，12カ所の避難目標地点が指定されている。その内１カ所は塩津小学校，２カ所は寺院，残り９カ所は集落内の空き地が指定されている。避難目標地点は，M8.6の地震時の最大波高5.6m が想定され，海抜６m 以上の場所が指定されている。避難経路は，現在決まっていない。

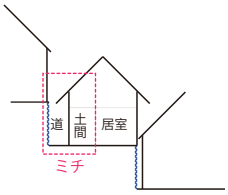


「ミチ」の計画

そこで，現在の集落動線に加え，同じ標高で水平に移動できる「ミチ」を，塩津集落の住居形式の特徴である「通り土間」を整理し活用した計画を行う。これにより，災害時の避難目標地点にたどり着く，あるいはそれらを相互に繋ぐための避難経路として有効であると同時に，集落全体の生活動線の範囲を広げることができると考えた。新たな「ミチ」は，現在定められている６つのコミュニティー単位に代わり「ミチ」単位の新たなコミュニティーを形成するための基盤ともなる。

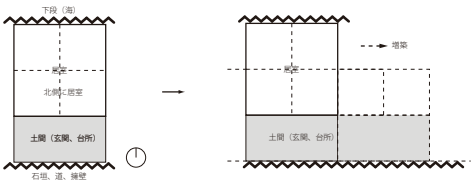


塩津集落の住居形式）



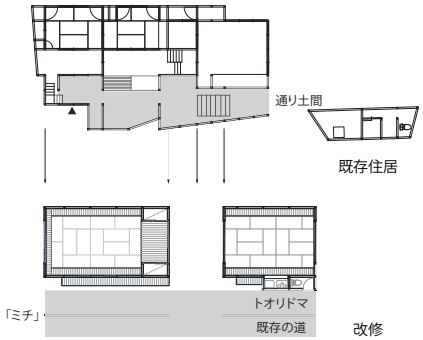
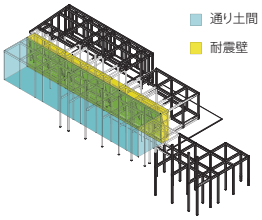
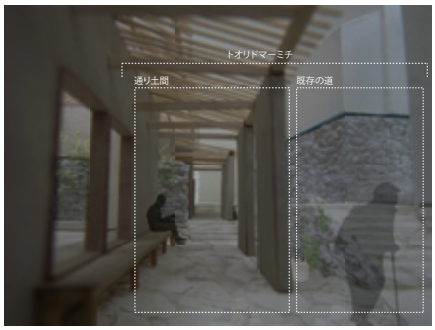
塩津集落の住居の内部空間は，間口が狭く奥行きが長い構成となっている。等高線の間につくられた細長い敷地の形状に合わせて，居室を敷地の北側（海側）田の字型に確保しつつ，居室南側の敷地境界までの空間に通り土間を配置して玄関や台所，便所などの水廻りを繋ぐ平面計画が一般的である。

通り土間は，道と平行して場合が多い。そこで，通り土間を既存の道と一体空間として捉え，計画を行うことで，通るだけの道ではない多様性のある「ミチ」空間を創出する。



計　　画）

今回対象としたのは，集落の東側に位置する標高６ｍの避難地点の南東に隣接する空き家である。この空き家は，南側に通り土間を持ち，住居の東に庭を持つ。土間の南側にある塀と道を挟んで約３ｍの石垣が立ち上



がる。通り土間を避難経路として確保するために土間に面した壁面や柱間に対して直角方向に筋交いを入れ，既存の柱，梁に抱き合わせて加構材を入れ込む。壁面に対して補強を行いながら，避難経路として確保しつつ日常の生活動線のなかの溜まりの場として空き家利用できる様に部分的な改修を行う計画である。通り土間を「ミチ」として利用することで，狭く通るだけの道が，通りやすくなるだけでなく，空き家の利用を兼ねた様々な生活の場面を生む計画である。